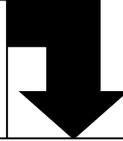


【的中問題！】一部ご紹介致します！

大原：公開模擬試験－第10問

製品アーキテクチャに関する記述として、最も適切なものはどれか。解答は問10へマークせよ。

- ア インテグラル型は、事前に部品の組み合わせ方のルールを決めておき、開発の際にはそのルールによって、部品間の組み合わせを行うことができる。
- イ モジュラー型は、事前に部品間の相互依存関係のあり方や部品の組み合わせのルールを完全には決めることができず、製品開発を行う段階で、全体の最適性を考え、各部品間の調整を行いながら完成度を高めていく。
- ウ 製品の機能と製品を構成する部品や要素の対応関係、および製品を構成する部品や要素のつなぎ方についての基本的な構想は、製品アーキテクチャと呼ばれる。
- エ クローズド型の製品アーキテクチャでは、部品の標準化度が高く、その部品を入手するためには特別な発注を行う必要がある。
- オ 何を自社で行い、何を他社に任せるのかの分業構造の決定に伴うアウトソーシングの問題は、「own-or-other」の問題とも呼ばれている。



本試験：第10問

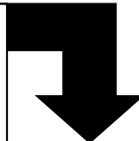
製品アーキテクチャーとは、製品を構成する個々の部品や要素の間のつなぎ方や製品としてのまとめ方である。製品アーキテクチャーに関する記述として、最も適切なものはどれか。

- ア インテグラル型のアーキテクチャーを持つ製品は、標準化が進んでいる。
- イ 擦り合わせによって創造される価値が差別化要因になる製品については、モジュラー型のアーキテクチャーを持つことが多い。
- ウ 部品間の相互依存性が高いインテグラル型のアーキテクチャーを持つ製品の場合、部門横断的に調整することが不可欠になる。
- エ モジュラー型のアーキテクチャーを持つ製品では、部品調達業者は、部品のコスト低減ではなく、部品の差別化をしなければならない。

大原：公開模擬試験－第21問

組織学習に関する記述として、最も適切なものはどれか。解答は問21へマークせよ。

- ア シングル・ループ学習とは、前提となる価値、目標、政策などのコンテキストそのものの修正を伴う学習のことをいう。
- イ 組織学習では、シングル・ループ学習もしくは低次学習が促進される傾向が強く、組織の発展過程では、基本的に漸次的進化過程はより強い慣性を持ち、一方で革新的組織変革は非常に困難になることが明らかになる。
- ウ 複雑な組織の下では、個人の自由な行動を抑制するような様々な制約が存在し、個人の信念の変化が行動の変化に結びつかないことがある。これは迷信的学習と呼ばれる。
- エ ダブル・ループ学習とは、所与のコンテキストのもとで、手段行動のエラーのみを修正する「サーモスタット」のような学習をいう。
- オ 個人もしくは一部門の行動と組織全体の行動との結びつきに断絶が生じている場合には、個人は学習し、それにもとづいて行動するが、それが組織の行動にはいかされない。これは曖昧さのもとでの学習と呼ばれる。



本試験：第22問

組織学習に関する記述として、最も適切なものはどれか。

- ア 「有能さの罠(competency trap)」とは、これまでの学習の結果として高い能力を構築し成果を上げているために、学習をやめてしまうことである。
- イ 高次学習とは組織の上位階層のみで生じる行動レベルの学習であるのに対して、低次学習は組織の下位階層のみで生じる行動レベルでの学習である。
- ウ 組織学習とは、組織ルーティンの変化の中で組織成果に正の貢献をもたらすもののみを指す。
- エ 組織メンバーが環境の変化に対応した新しい知識を獲得しても、組織によって規定された役割が制約となって、組織としての学習が進まないことがある。
- オ ダブルループ学習とは行動とその結果を振り返り行動を修正することを何度も繰り返すものであるのに対して、シングルループ学習とは行動を一度だけしか修正しないものである。

◎ 企業経営理論

【総評】

令和6年度の本試験は、量の面から見ると設問数は41設問と昨年と同数である。昨年度までと比べ、解答の判断が難しい問題もあったが、全体としては例年並みの難易度であったと思われる。

難易度を決める要因の一つとして、選択肢の数があるが、4肢択一形式と5肢択一形式の問題を比較すると後者の方が難易度は上がる。本年の出題状況を見ると、4肢択一形式と5肢択一形式の設問の比率が15対26になっており、昨年の17対24よりも5肢択一形式の出題数が増加している。よって、難易度は下がっていないと思われる。

出題の分野別内訳をみると、戦略論が13設問（第1問～第13問）、組織論が14設問（第14問～第27問）、マーケティング論が14設問（第28問～第40問）であった。近年の出題傾向と比較しても、出題の分野別内訳はほとんど変化していない。

分野ごとに見ていくと、戦略論は、5肢択一形式の設問が11問（昨年8問）である。頻出論点である第4問（PPM）、第7問（5フォース分析）、第10問（製品アーキテクチャー）、などで得点したい。また、第13問（エフェクチュエーション）は、4年連続で出題されており、過去問題の攻略も必要であった。

組織論は、5肢択一形式の設問が7問（昨年10問）であった。第24問～第27問までの労働契約等、労働者派遣、育児・介護休業法、就業規則など、労働関連法規に関する問題では、時事的な要素を含む出題もみられ、その対策の有無で対応は分かれたと思われる。第18問（モチベーション理論）、第22問（組織学習）などの問題で得点したい。

マーケティング論は、5肢択一形式の設問が8問（昨年6問）であったが、昨年と同様、判断に迷うケースがあったと思われる。第28問（ブランド・マネジメント）、第36問（新製品に関する先発優位と後発優位）、第37問（価格設定）などで得点したい。その他、マーケティングに関する専門用語が問題の随所に見られたため、これらを正しく把握できていたかどうかで、得点に影響があったものと思われる。

以上